
待夢カプセル

紅嶋麗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

待夢カプセル

【Nコード】

N1058Q

【作者名】

紅嶋麗

【あらすじ】

あなたの命日に、あなたと再会した・・・。

三年前の花火大会の日、それは彼と初めて迎える夏の日の思い出になる筈だった。あの交通事故さえなければ・・・。

彼が亡くなって、彼女はその悲しみを乗り越えようとしていた。

あれから三年が過ぎて拒否し続けていた花火大会に迷い込んでしまった彼女。大勢の人混みの中で視線の先にあったのは、他でもない彼だった。

切なくも前向きに生きようとする彼女。不意の再会が彼女にもたら

すものは何か？

胸騒ぎ

こんな季節は大っ嫌い！

せっかくキメたメイクも汗で台無しだし、UV仕様で肌を完全防備しないとすぐに黒くなってしまう。街に出ると、太股と胸に集中する男たちの視線が突き刺さるように痛い。かといって布を増やしたら携帯サウナ状態になっちゃうし……。もうどうしたら良いの？

派遣のバイトがキャンセルになって暇になった私は、この蒸し暑い一日をどう過ごそうか悩んでいた。最近稼いでないから、一日中エアコン付けてDVD三昧なんて訳にはいかなかった。帰省や旅行で友だちがみんな出払っていて、誰も私と行動を共にする者はいない。この日の私は、ただ目的もなく独りで街に出るしかなかった。

部屋から歩いて五分のところにあるアーケード街は、いつもより活気にあふれていた。それもそのはずで、この日は夕方から花火大会が開催されるのだ。

あれは今からちょうど三年前だった。私が今いるこの場所で大きな花火大会があると聞いて、私はその夜に彼と過ごそうとしていた。ちょうど新しい浴衣が手に入ったので、花火大会でこれを初めて着ようと決めていた。彼と過ごす初めての夏。いつもとは違う和風の私を見せてあげたかったのだ。

待ち合わせの場所には三十分も早く着いた。デートにはいつも遅刻していた私は、それまで彼を待ち遠しく感じる事はなかった。どんなに遅刻しても決して怒らなかつた彼。それでも本当はきつとイライラしてたんだろうなと肌で感じていた。

ところが、予定の時刻を過ぎても彼は一向に来なかった。携帯を何度も鳴らしたのに出てくれない。人が大勢集まり過ぎて私を見つけれないのだろうか？それとも待ち合わせ場所を間違ったのだろうか？いや、そんな筈はない。待ち合わせの時刻と場所はメールで

決めたから、間違えるなんてあり得ない。今だってメールは残ってるのだ。

花火は既に始まっていた。周りはどこを見ても家族連れかカップルか団体だ。独りで眺めているのは、きっと私だけなのだろう。花火から発する大音響と携帯のコール音が妙にシンクロして、それが私の不安をかき立てていた。

大勢の人々の中で私はたった独り。部屋で独りであるよりも、大勢の中にいるからこそ本当の孤独を感じてしまうのだ。会える筈の彼が現れない事で、予想もしない孤独が私の胸を突き刺していた。気付けば花火は終わっていた。周りの多くの人たちが帰路へと急いでいる。私は呆然となって川のように流れていく人々を眺めるしかなかった。

余りにもコールし過ぎた為、携帯の充電が切れてしまった。こんな人混みじゃ公衆電話も探せない。それに彼の電話番号は携帯のメモリーに記憶させているだけで、私自身がそれを記憶しているわけではなかった。家に帰って充電するまでは、彼と連絡を取る手段が完全に絶たれた状態のままだ。

人の流れが落ち着いた頃、私は帰るべきか彼のところへ行くべきか悩んでいた。

それにしても彼はどうしてしまったのだろう。デートで遅れるなんて、今までの彼にはあり得ない事だった。特別な何かが起きたのだろうか？寂しさが不安に変わり、胸騒ぎは鼓動に変わった。

別れ

このまま彼の部屋へ向かっても、きっと会えないだろう。そんな予感が私にはあった。自分の部屋へ戻って携帯を充電しながらもう一度電話を試みよう。そう思い、私は部屋へと戻った。見知らぬ人々の喜びの表情を後目に孤独感を噛み締めながら……。

部屋に戻り真っ先に携帯を充電した。疲れた身体に鞭を撃つように、私は再び電話をしようとした。しかしその瞬間に着信音が静かな部屋で鳴り響いた。

一体誰なの？これから大事な電話をしようとしているのに。そう思いながら電話の主を確認しようと携帯のサブディスプレイを眺めた。そこには彼の名が表示されていた。

心配してたのに、何で今さら？もう日付が変わろうとしているというのに。ずっと彼の事を考えていたのに。今日の約束は覚えていたのだろうか？

そんな思いが交錯して、少し腹立たしくも感じながら通話ボタンを押した。

「もう！何してたの？ずっと待ってたんだよ！電話くらいくれたって良いでしょ？」

彼の声を聞く間もなく、私は彼を攻め立てた。しかし電話の向こうからは聞き慣れない女性の声があった。私の名を、か弱い声で確認するように聞いてくる。余りにもか弱く深刻さが伝わってきたため、彼と深い関係の人物からの特別な知らせである事は容易に想像出来たのだった。

「落ち着いて聞いてね」電話の向こうの女性が念を押すように話し掛けた。

「こんなに遅い時にごめんなさいね。今まで電話出来ない状況だったから」

電話の主は彼の母親だった。声が震え、時折鼻をすすする音が聞こ

えてくる。

ただ事ではないと感じた。特別な知らせを聞くのには、私にも覚悟が必要なのだと感じた。

そんな悪い予測が的中しているのを実感するのに長い時間は必要なかった。彼の母親からの言葉を聞かされて、私は暫く言葉を失ってしまった。

バイクで走行中に車と正面衝突をしたというのだ。夕方だった。

この日はたまたま実家から彼の母親が訪ねて来ていた。夕方になって凄まじい形相で帰って来たのだという。バイトが長引いてしまったのだろうか？

母親は、その日に私と会うことは知っていたようだ。約束事をきちんと守るタイプの彼は、待ち合わせの時刻に遅れてしまう事をどうしても避けたかったようだ。落ち着くように説得したもの、その甲斐もなく慌てて部屋を飛び出して、そのまま走り去ってしまったというのだ。

きっと私に会うために急いで向かってくれたのだろう。遅れそうだから待っていて欲しいって一言言ってくれば良かったのに・・・。

激しい衝突は頭部を強く打撲し、それが致命的となったのだという。病院での必死の治療も虚しく、花火大会が始まる頃に彼は息を引き取ったというのだった。

彼とは沢山喧嘩をして沢山酷い目にも遭わせてしまった。あの日の花火大会は、二人の間に開いてしまった大きな穴を埋めるためのものでもあった。彼には沢山謝ることがあった。それなのに、もう面と向かって謝るべき彼がこの世にいないというのだ。

不意の再会

余りにも突然の別れだった。どんなに努力をしても叶わない彼との関係の終焉を迎えるなんて……。失恋よりも決定的で修復不可能な別れだった。再会する事さえ出来ないのだ。

彼を失った私は、その悲しみを乗り越えるのに必死だった。大学のキャンパスで一緒に受けていた講義も、ずっと一人で受けなければならぬ。友だちとの食堂での会話も、どことなく私に気を遣っている。私の前では自分たちの彼氏の話をしようにしなくなった。もう私の身の周りで生身の彼を感じる事は出来ない。ついこの間まで同じ空気を吸っていたというのに……。

あの日から彼と過ごしたあらゆる空間を避けようとしていた。彼と過ごした思い出のかけらを感じると、急に悲しくなり涙が出てしまうから……。

それでも彼とは心の共有をしたいと無意識の内に考えていたのだろう。大学では彼も私も日本文学を専攻していた。私は他に行きたい学部がなくて入っただけだったが、彼は心底文学を愛していた。好きな詩人の作品を一つ一つ取り上げては、それについて熱く語る私には良く分からなかったけど、一つの事に打ち込んでいる彼がたまらなく好きだった。そんな彼が愛した文学を私も好きになる事で、彼を私の心の中で生かしたかった。

彼が亡くなって一年が過ぎた頃、教養課程から専門課程を迎えた私は、自分の進路について真剣に考え始めていた。それまで何気なく受講していた教職課程を、これからは真面目に受けようと考え始めた。彼が愛した文学をこれからの人生で共有する為には、国語教師として生きていこうと決意したからだ。

新しい恋をみつけるべきだ何人も友だちから何度も進められたが、そんなつもりにはなれなかった。私の心の中で、いつまでも彼が生きていたからだ。

そんな決意をして早くも二年が過ぎ、彼が亡くなってから三度目の夏が来た。

大学は無事に卒業した。教員免許も取得した。でも私はまだ教師にはなれない。就職先が決まらないまま、派遣のバイトを始めてから数ヶ月が過ぎていた。

一人暮らしをしている私は、何よりも毎月の生活費を心配しなければならぬ。教員採用試験の準備や私立校巡りは生活費を稼いでから後の話だ。好きでバイトに明け暮れたわけではないが、日々めまぐるしく変わる職場環境が教員への道を歩もうとしているモチベーションを少しずつ低下させていた。

気付けば陽はすっかり暮れていて、間もなく花火があがろうとしていた。すぐにでもこの場を立ち去ろうと足早に部屋へと向かおうとしているのに、大勢の人々の波が行く手の邪魔をする。どうしてこんなところに来てしまったのだろう。寄りによって花火大会のある日に会場に来るなんて。花火を観たくないからバイトを入れたのに、今日に限ってキャンセルだなんて……。

場内のアナウンスが開会を宣言する。そして間もなく最初の花火があがろうとしていた。

その瞬間、私は自分の目を疑うものを見てしまった。まさか……。いや、そんな筈は……。これは疲れから来る幻覚なのか？私は何度も目を擦ってしっかりと意識で視線を向けた。それでも視界に入るもの。それは三年前に亡くなった筈の彼だった。

生きている彼

彼はすぐに私の視線に気付いた。そして安心したかのように微笑んだ。三年前の花火大会で会えなかった筈の彼が、私の目に実像として写っている。

「ごめん。バイトが長引いちゃってすっかり遅くなったよ。随分と探したんだぞ。でも会えて良かった」彼が私に話し掛けた。

その時の私は一体どんな表情だったのだろう。もう会うことが不可能な筈の彼が、三年前と変わらないまま私の前に現れたのだ。

「え？いや、あの・・・」私は彼の言葉にどう答えたら良いのか分からなかった。

「変な奴だなあ。さあ一緒に観よう」

彼が私の手を取って歩き始める。彼の温かい手の感触が、夢でも幻覚でもない事を自覚させていた。

大勢の人の波に揉まれながら、私たちは夏の夜空に舞う花火を眺めている。浴衣は着てないけれど、三年前に果たせなかった事が漸く現実になった。それでも、どうしても納得のいかない事があった。私と一緒に花火を眺めている彼は、本当にあの彼なのだろうか？

それでも彼だと確信出来る部分が幾つもあった。何気ない仕草や声、そして言葉遣い。二人だけが共有する思い出話。三年前までの記憶が走馬灯のように蘇る。ここに居るのが彼じゃなかったら、一体誰だということのか？

「不思議だなあ。君と会うのが随分と久しぶりのような気がする。それに、君が少し年上に見える」彼は私の耳元で話し掛けた。

三年も経ってるのだから当然だ。私はもう二十二歳。でも彼は十九歳のままなのだから。彼は自分が死んでしまった事を自覚してないというのか？私はこの三年間、何度も彼の墓を訪ねていた。その度に近況を報告していたというのに、彼はそれを知らないのだろうか？また近い内に墓参りへ行こうと思っているというのに・・・。

花火が終わって人の波が過ぎ去った。静けさを取り戻した街は、どことなく寂しげだ。

この後、彼とどう過ごすべきか迷っていた。三年前の約束では彼と朝まで過ごす筈だった。今の私にはバイトがある。三年を経ての予期せぬ再会は少し不便だ。彼との時間を共有する為には、心や気持ちの準備と整理が必要だからだ。

彼は私の戸惑いを察したのか、今夜は帰ると言い出した。彼とはずっと一緒にいたかったが、確かにその方が良かった。

「また会えるよね？」急に不安になった私は、彼にそう尋ねた。「嫌だなあ。永遠の別れじゃないんだから」彼は笑った。

私の不安はどこまで彼に伝わっているのだろう。彼とは永遠の別れをした筈だった。科学的に証明が不可能な筈の不意の再会を果たした今、彼とはこれから一緒にいられるのかという不安があった。「俺、君を幸せにしてあげられてるのかなあ」彼は呟いた。

何気ない一言だったのかも知れない。それでも三年の月日の思い出から来る重みが、私の目に涙を溢れさせた。

そんな私に気付いたのか、彼はそっと私を抱き寄せる。彼の体温と鼓動が泣きじゃくる私の頬に伝わって来る。彼は生きているのだ。

心の揺らぎ

「今日は楽しかったよ。ありがとう」

一人になって部屋に着いた頃、彼からメールが届いた。まさかそんな筈は……。私の携帯には三年経った今でも彼のアドレスと番号をメモリーに記憶させていた。それでも彼が亡くなってからすぐに携帯は解約されていた筈だったので、メールなど届く筈はなかった。私はすぐさま彼に電話した。案の定、この番号は使われてないというアナウンスが流れていた。

一体どうなってるのだろう。私はどうかしてしまったのだろうか？私の前に突如として現れたのは彼だ。だとしたら柩の中で安らかに眠る彼の姿の忘れられない記憶は何だったのだろう。彼を失った悲しみと、それを持ち越えようとした私の頑張りは何だったのだろう。今夜の彼は触れる事も食事をする事もキスをする事さえ出来たというのに……。

翌朝、いつものようにバイトへ出掛けた。いつもの満員電車で揺られながら、携帯を何度も開き、昨日の彼からのメールを確認した。やはりメールは届いていた。夢なんかではなかったのだ。

現場に着いて衣装に着替えた。スカートがやけに短い。こんな格好で一日中決められた台詞をスピーチしなければいけないのかと思うと、それだけで気分が滅入ってしまう。イベントコンパニオンの仕事は想像以上に過酷だった。今日もまた灼熱の太陽とアスファルトの照り返しと下心丸出しに迫る大砲のようなカメラレンズとの戦いが始まる。こんな姿は彼には絶対に見せられるものではなかった。

こんな仕事をしていると、時々芸能事務所から名刺を渡される事がある。休憩中や仕事の後にマネージャーの目を盗んで渡してくるのだ。スカウトと思われる人物の口調はいつも同じだ。君なら絶対ブレイクするとかフリーターなんてもったいないとか……。芸能界なんて考えたこともなかったが、例え見知らぬ男とはいえ褒め

られるのはまんざらでもない。

教員採用試験は狭き門だ。教員免許を取得しているからといって、簡単に通るものではない。確かにこの国の将来がかかる責任ある仕事だから、採用する側も簡単に決めるわけにはいかないのだろう。そんな事はこの仕事に就こうと決意した時点で分かっている筈だった。

どんなに切望しても採用されなければ意味がない。これから先、ずっと採用されないままだとフリーターとして生きていくしかない。一般企業に就職したって将来が約束されるような時代じゃないし、もしかしたらこんな生き方もありなのかも知れない。沢山の努力をしても振りむいてくれないなら、望んでくれている人のところへ行った方が楽なのかも知れない。こんな葛藤が私の判断を少しずつ鈍らせていた。

彼の墓の前では素直でいるつもりだった。でも、たった一つだけ彼には嘘をついていた。それがこの葛藤だった。こんな心の揺らぎを十九歳の彼が知ったら、一体どう感じるのだろう。

墓前の彼

彼から連絡がないまま一週間が過ぎた。墓参りは前々から決めていた。生きている彼がいる事を知っていながら墓参りなんて、何だか違和感があった。

電車で揺られて二時間。墓地への道のりは遠い。暦の上では秋に入っているというのに、太陽がじりじりと肌を刺激する。蝉の大群が耳障りなほどに激しく羽音を立てる。いつまでも続く長い階段を、体中に汗を流しながら黙々と登る。お盆を少しだけ過ぎた墓地には誰もいない。何度もここを訪れた私にとって、もうこの景色もすっかりと慣れてしまった。

階段を登りきると間もなく目指すべき墓があった。するとそこには人影があった。人影は墓の段に腰掛けて少しも動こうとしない。近づくに連れて、その人影が誰のものなのか分かった。彼だった。「まさか自分の墓を見る事になるなんて思わなかったよ。幽霊なんているもんかとずっと思ってた。それなのに、俺が幽霊だなんて・・・」私に気付いた彼は、寂しそうに顔を上げた。

「心配したんだよ。もう会えないのかと思ってたんだから」

「ごめん。花火大会が終わって帰ろうとしたけど、俺には帰るべきところがないと気付いたんだ。俺の部屋には別の人が住んでいた。それに誰も俺に気付かないんだ。誰に話し掛けても振り向いてくれない。言葉を交わす事も触れる事も出来ないんだ」

私はただひたすら黙るしかなかった。

「実家に戻っても、誰も俺に気付かない。家族が俺に気付かないんだよ。でもそこで知ったんだ。俺・・・死んでたんだな。三年も前に・・・」

「酷いよ」私は泣きじゃくりながら口を開いた。

「突然死ぬなんて、あんまりだよ。あなたがいなくなっただれほど泣いたか分かってるの？どんなに苦労したのか分かってるの？私は

ずつとここであなたに話し掛けてたんだよ。それなのに、死んだことさえ知らなかったなんて……」

「確かに俺はここにはいなかった。君がこの三年間どんな想いで暮らしてきたのか、全く知らなかった。本当は君の側にいて守らなきゃならなかったんだろ？」

「この三年間、何処にいたというの？」

「それが分からないんだ。俺の記憶は、三年前の花火大会の時に急いでバイクに乗って走り出したところで途切れてたんだ。事故を起こした記憶もないんだ。おかしいだろ？どこも痛くないし、怪我だつてしてない」

確かにその通りだった。体中が血まみれになっていた筈の彼が、何事もなかったかのように現れたのだから。

「でも、ここに来て全てが分かったよ。何故かここに来た途端に分かったんだ。君がここに残した全ての言葉を一気に吸収したんだ。まるで乾いたスポンジが水を急激に吸収するように。……大変だったんだね。」

私たちは抱きしめあっていた。彼の息も鼓動も言葉も、私だけが感じられる。こんなに温かいのに……。こんなに優しいのに……。例え幽霊でも良い。生きていた頃と変わらない、優しい彼のだから。

同棲

「ねえ、一つ気付いたんだけど」

「何だい？」

「花火が終わった後、一緒に食事をしたよね？」

「うん」

「その時、あなたも注文したよね？」

「確かにそうだった」

「もしかすると、私と一緒にいる時はみんなあなたのことが分かるんじゃない？」

それはちょっとした発見だった。花火大会の時、あの人混みの中で彼は何人かの人とぶつかっていた。彼が一言謝ると、相手も軽く会釈していた。レストランでの食事の時も、ウェイトレスは彼にも注文を聞いていた。生きている人と全く変わらなかったのだ。

私と別れた後に彼はメールをしていた。彼の携帯にも同じメールが残っている。彼は彼で私からの返信がなかったのを不安に思っ、電話をしたのだという。しかし電話が繋がる事はなかった。

私に連絡がつかない事で、彼もまた途方に暮れていた。それから彼の記憶は曖昧だった。実家にはどうやって行ったのか覚えてないというのだ。それでも家族たちの会話から自分の墓参りがある事を知り、一緒について行こうと決めたのだった。そして気付けば墓前にいたというのだ。

彼には十歳にも満たない妹がいた。墓前で彼は妹と視線が合った。妹は彼に微笑んだ。彼女には彼が見えるようだ。しかしそれは墓前にいる時だけで、帰る頃には彼女にも見えなくなってしまったようだ。

「ねえ。今なら携帯も繋がるんじゃない？」そう思った私は早速彼の番号に電話を掛けた。コール音が聞こえてくると同時に着信音が鳴った。

彼は私と一緒にいる時だけ生きている人と全く変わらずにいられるようだ。どうしてなのかは彼にも分からないらしく、この発見に彼も目を丸くしていた。それならこれから先はずっと一緒にいよう。私たちは、そう誓い合った。

こうして、彼の生前に実現しなかった二人だけの同棲生活が始まった。バイトのある日を除いて、朝起きてから夜寝るまで私たちは一緒にいた。一緒にスーパーへ行つて食材を選び、一緒に料理を作ったりもした。ささやかだったが幸せな日々だった。私の稼ぎだけで生活しなければならなかったので金銭的には苦しかったけど、こんな日がいつまでも続いて欲しいと願っていた。

やがて季節は移り変わり、落ち着いた空気の中で街路樹が秋色に染まっていく。日を追う毎に私を纏う布の面積が増えて、男たちの狂気の視線からも逃れられるようになった。

彼との共同生活に慣れた私は、このまま三年間の空白が徐々に埋まっていくかと思えた。かつての私は文学の話についていけなかったが、今では彼も知らない事を話せるようになった。墓前で吸収したという私の言葉を、彼は実感として噛みしめられる喜びを感じていた。しかし、それと同時に私が抱えている葛藤を彼に悟られていた。彼は口には出さなかったが、揺らぎの中にいる私に少し不満を感じている様子だった。

裏切り

そんな中、私は面接を受けに会場へと向かっていた。芸能事務所からグラビアアイドルとして売り出したという申し出を受けての事だ。海外ロケでDVDが出せるかも知れないという誘いの言葉に心が揺れた。それまであまり本気にしなかったが、何となく話だけでも聞いてみたくなった。履歴書は彼がいなくてここで準備していた。面接もバイトと偽った。

一体何してるんだろ。そんな気持ちじゃなかったわけではない。その頃の私は、どんな形にせよ職業と呼べるものを持ちたかった。後先など考えてる余裕などなかったのだ。いつなれるか分からない教師をいつまでも目指すより、せつかく勧められている芸能の道を歩むのも悪くはない。面接もあまり深く考えての事ではなかった。

目的地に着いた私は少し愕然としていた。想像とはかけ離れた雑居ビルで、今にも崩れてしまうのではないかと思える程に古びていた。エレベーターには下品な落書きが這い蹲るように書き記されている。事務所は最上階にあった。行き先のボタンの文字が少しはげている。エレベーターは大きく揺れながら最上階へと向かった。

最上階に着いてドアが開くと、すぐ目の前に入り口があった。呼び出しブザーもインターホンもない。不安を押し切ってノックをする。数秒間応答がなかったが、足音が聞こえてくると同時に曇りガラス越しに人影が見えた。

扉の向こう側では軽快な音楽が鳴り響いていた。壁には所狭しとグラビアアイドルたちの大きなポスターが貼られている。案内されたテーブルにはグラビア誌やDVDが無造作に積み上げられている。パーティションの向こう側からは女の子たちの笑い声が聞こえてくる。内容までは分からないが、誰かの悪口のような。聞いていて心地良い会話ではなさそうだ。

暫くして二人の男たちが現れた。歳の離れた社長と部下という感

じだ。二人ともスーツ姿だったが、どことなくチャラチャラしている。会社員というよりも水商売に近いスーツ姿だ。

こうして小さな雑居ビルの片隅で夢のような話が展開された。有名な雑誌に沢山出られる事から始まり、DVDや写真集を皮切りにテレビ出演に至るまで、まるで何の弊害もないかのような口振りだ。話を聞いただけで芸能人になったかのような錯覚にさえ陥る。冷静に聞けば矛盾点が幾つも感じられただろう。しかしその時の私は彼らの話を夢中になって聞いていた。

話は二時間程で終わった。契約書を差し出されたが、どこかで不安を感じていた。署名捺印は後日という事で話を終えた。

再びエレベーターに乗ってビルを出ようとした。真っ暗な廊下から急に明るい日差しの中へと出たため、眩しさが視界を覆い尽くした。眩しさの余りに一瞬だけ歩みが止まった。

人通りの少ない小道の隅に配置された電信柱に人影がある。・・・

・彼だった。

どうしてこんなところにいるのだろう。まさか私に気付かれないように後をつけて来たのだろうか？

彼が私に気付くとすぐに話し掛けてきた。表情は曇っている。私がしていることを面白く感じてないのだろう。彼の墓前で交わした約束を破ろうとしているのだから。

消えてしまった彼

「俺、色々と分かったんだ。どうして君の前に現れる事が出来たのか。意図的に現れたり消えたりするにはどうしたら良いか。分かれば分かる程、俺はもうこの世の者ではないと自覚させられたよ」

彼は淋しそうに笑った。私には返せる言葉がなかった。

「面接しているところを見せて貰ったよ。俺がいるの気付かなかっただろ？」

「ごめんね……」

やっとの思いで出せた言葉だった。

生前の彼には沢山酷いことをしてきた。その度に彼を惑わせ、そして苦しめてきた。些細な事で悩み、自分を見失っては彼を困らせてしまう。そんな繰り返しをする自分が嫌いだった。彼を失った悲しみを乗り越えようと必死に過ごしてきた私は、強い人間になれたのだと勘違いしているのかも知れない。今でも彼に知られては困るような行動をとってしまったているのだから。

「君が本当に目指したいのなら構わない。俺に遠慮する必要なんてないんだよ。でも、本当に迷いがないと自信持って言えるのか？」

私は黙って俯いていた。本気で芸能界を目指しているなんて胸を張って言える筈はなかった。

「今の君は単に流されているだけのように見える」

痛いところをつかれてしまった。どんなに言葉を生み出そうとしても、全てが言い訳に聞こえてしまう。反論なんて出来る筈がなかった。

「正直言っただけだよ。俺は今の君とは一緒にはいられない」
そんな一言を残して、彼は存在を消してしまった。どんなに叫んでも彼は現れてはくれない。私はただ泣きじゃくるしかなかった。

次の日、芸能事務所には断りの電話を入れた。随分と引き留められたが、彼との関係を修復する為にはそうするしかなかった。

バイトに明け暮れる日々は続いていたが、これからの自分について考える時間が今までよりも増えていた。三年前の決意は忙しさを言い訳にしてあやふやなものへと変化させていた。成果を得られないまま時間だけが過ぎ、それが焦りとなって判断を鈍らせていた。ねじ曲がってしまった私を再び純粋な気持ちに戻せるのかという不安はあったが、何もしないよりは何かをして結果を残すべきだと考えるようになった。

空はすっかり秋色に染められている。街路樹も真っ赤に染まり、アスファルトの上を粉々にされた枯れ葉が舞っている。涼しさを通り越して少し寒く感じられる公園のベンチに座り、暫く開くことのなかった詩集を再び読み始めた。彼が好きだった詩人の作品に触れる事で、存在を消してしまった彼を感じたかった。

彼が存在を消してどのくらいの日々が過ぎたのだろう。あれから三年前の情熱を取り戻そうと必死に過ごしている自分があった。

変化

今にして思えば、生まれてからずっと私はただ周りから流されているだけだった。三年前の花火大会で彼が命を落とさなければ、今の私にこんな生き方が与えられていなかったのかも知れない。気付けば私にとっての文学は彼を感じる為のものではなく私自身が愛すべきものになっていた。私にとって初めて真剣に取り組めるものになっていたのだ。

自分を見つめ直すにつれて、稼ぎ方も考えるようになった。イベントコンパニオンも悪くはなかったが、将来の自分に経験として残せるものをやるべきだと感じるようになった。通勤電車の中で携帯のバイト情報サイトを閲覧した。塾講師の募集があった。私に務まるのかという不安はあったけど、挑戦してみる価値はあると思った。特に問題なく面接が通り、すぐに授業を受け持つて欲しいという返事があった。秋から冬にかけての季節は受験生にとって追い込みの大事な期間になるから頑張つて欲しいという塾長からの激励の言葉と共に、山ほどの参考書や問題集を渡された。高校を卒業してから接する事のない書物を開き、懐かしさを感じながらも学習に勤しむ自分があった。

生活の為にイベントコンパニオンとの掛け持ちで始めた事だった。これまでよりも忙しい筈なのに、毎日が楽しく感じられる。目的に向かつてステップを確実に踏んでいるという実感が、様々な活力を見いだしていた。

彼は今頃何処で何をしているのだろう。私のこうした変化に気付いてくれているのだろうか？それとも、もう許してくれないのだろうか？単に甘えたいのではない。例え遠くからでも良い。頑張っている私を見ていて欲しいだけだった。

いつから始めたのだろう。部屋の片隅に立てかけた写真スタンドの中の彼に毎晩話し掛けるようになっていた。彼が現れてからは一

時的にそんな習慣を忘れていたが、再び姿を消してから暫く経って
気付けばまた話し掛けていた。もう会えないのかも知れないと諦め
掛けていた。

塾の授業を翌日に控えていたその日も、私は写真スタンドの中の
彼に話し掛けていた。

「頑張れよ」

背後から優しく暖かい声が聞こえる。幻聴だと思った。しかしそ
れにしては鮮明過ぎる。今の言葉は音として聞こえたのではないか。
私は彼がそこにいるという確信の元、ゆっくりと声のする方へ振り
向いた。

やはり彼だった。少しはにかみながら私を見つめていた。

「酷いよ。現れたり消えたりして。ずっと会いたかったんだよ」
「知ってるよ。ずっと近くにいたんだ」

またしても私は大粒の涙を流している。泣くのが癖になってしま
ったのも、きつと彼には分かっているのだろう。

「ごめん……。だから俺もけじめをつけなければならないと思
ったんだ」

「けじめ？」

彼は静かに頷いた。再び彼が現れたのだというのに、不安が私の
体内を駆け巡った。

「これからも一緒にいられるんだよね？」たまらなくなって彼に尋
ねた。しかし彼は首を縦に振らない。

「これから話す事をきちんと聞いて欲しい」彼は重い口を開いた。

情熱

「もう本当のお別れが来てしまったんだ。俺はまだ暫くは君の側にいられるのかも知れない。でも、君は俺を感じられなくなるんだ」

「そんな・・・」私は震えた。

「ずるいよ。私だってあなたを感じていたい。あなたには私の事が分かるのに私があなたを感じられないなんて不公平だよ」

「俺だって同じ気持ちだ」彼は少し言葉を荒くした。

「・・・ごめん。でも分かかって欲しい。命を落とすという事はそういう事なんだ。俺は三年前の花火大会の日に命を落とした。その事実だけはどうしても変える事は出来ないんだ」

私は彼の胸の中で泣いていた。彼はいつもより強く私を抱きしめた。

「俺がいつまで君の側にいられるのか分からない。次の人生が始まる頃には、今の記憶は全て失ってしまう。それがいつになるのか俺にも分からないんだ」

「私はこれからどうしたら良いの？」

「君はまだ生きてるじゃないか。自分が信じた道を進んで行って欲しい。そして幸せになって欲しい」

私たちは暫くの間ずっと抱きしめ合っていた。ずっと、いつまでも・・・このまま時が止まって欲しかった。時が止まればいつまでも一緒にいられるのだから。

しかし時計の針は無惨にも確実に時を刻む。そして彼が少しずつ透明になる。彼が再び現れてから過ごした日々が急激に思い出へと変化していく。気付けば彼の体は向こう側がはっきり見える程になっていた。

「幸せになるって約束するね？俺との最後の約束だよ」

彼は小指を差し出した。私も小指を差し出して、小指と小指を絡め合っていた。

彼の表情には翳りがなかった。私もまた彼に満面の笑顔を見せた。本当の別れなら、笑顔で送り出したかったからだ。

やがて彼が完全に見えなくなり、私は彼を感じられなくなった。微かに残る小指の感触を残して……。

塾の授業は成功を収めた。先生と呼ばれるのはなかなか慣れないけど、黒板の前に立って交わす生徒たちとの会話には心地良ささえ感じる。

枯れ葉が散り、木々がすっかり裸にされている。人々の生活もそろそろ冬への支度を始めている。それでも私の情熱は冷めることを知らない。

私はもう淋しくはなかった。彼はこれからもずっと私の心の中で生き続けていくのだ。私にとっての情熱の姿として……。

彼はきつと、沢山の想いを詰め込んだ待夢カプセルのように、忘れかけていた情熱を掘り起こし、そして消えて行ったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1058q/>

待夢カプセル

2011年1月11日17時56分発行